

資 料

ネル・ブロイニング経済・社会倫理研究所

Nell-Breuning-Institut für Wirtschafts-und Gesellschaftsethik

増 田 正 勝*

I. は じ め に

フランクフルトのザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学（Philosophisch-Theologische Hochschule Sankt Georgen）にネル・ブロイニング教授を訪ねたのは、1982年の夏のことであった。当時、ミュンヘンのニンフェンブルク宮殿に近い、イエズス会のゲスト・ハウスに起居していたが、筆者がネル・ブロイニング教授に会いに行くというと、ゲスト・ハウスの人々は、ろくろくドイツ語も話せない、あなたのような一介の日本人に、あの高名な先生がそう簡単に会ってくれるはずがないと、まったく信用してくれなかった。面会の日時を記した、教授からの手紙を見せると、驚きとともにいかにも理解し難いといった表情を浮かべていた。

1981年の暮れに出版した『ドイツ経営政策思想』（森山書店）の概要をドイツ語に直したものと、ネル・ブロイニングの学説を扱った論文数本を同封して、面会を申し込んでいたのである。上述の研究書は、ドイツ経営社会学・経営社会政策論の生成・確立期に、ゲッツ・ブリーフスを中心に一群のカトリック社会学者たちが活躍したことを、学史的・思想史的に明らかにしようと試みたもので、ネル・ブロイニングの学説は部分的に取り上げているにすぎなかった。それにもかかわらず、筆者の申し出を快諾する旨の手紙が届いたのである。

前日はザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学のゲスト・ハウスに宿泊させていだいて、午前10時にネル・ブロイニング教授を研究室に訪ねた。ちょうど同大学に滞在中であった上智大学神学部教授の百瀬文晃神父に通訳をお願いした。とくに共同決定の問題を中心にたくさんの質問を用意していったが、ゆっくりとした口調で、

* 広島経済大学経済学部教授

ひとつひとつ丁寧に答えてくださった。

このとき、ネル・プロイニング教授は、すでに92歳のご高齢であられた。しかし、筆者の質問に的確かつ簡潔に答えられる、その明晰な頭脳と、ときおりきらめく鋭い眼光は、歳を忘れさせるものがあった。しかも筆勢は衰えるところを知らず、時代の問題についてコンスタントに論説を発表しておられた。およそ1時間ほどであったが、筆者自身の思想形成のアルファでありオメガともなっている、敬愛する教授に親しくお目にかかれたことは、生涯忘れ得ぬものとなっている。

その後、1999年に、長年の研究成果を『キリスト教経営思想－近代経営体制とドイツ・カトリシズム』（森山書店）として上梓することができた。全10章の中、三つの章で、ネル・プロイニングの労働組合思想、所有参加思想、共同決定思想を取り上げている。まさにネル・プロイニングの思想を導き糸としてまとめられた研究であった。1991年8月、教授は101歳で帰天され、残念ながら献本を果たすことはかなわなかった。

ネル・プロイニングの功績を称えて、彼の死後、1991年に設立されたのが、「オズワルド・フォン・ネル・プロイニング経済・社会倫理研究所」（Oswald von Nell-Breuning-Institut für Wirtschafts- und Gesellschaftsethik）であった。一度訪れてみたいと思っていたが、今夏ようやくそれを実現することができた。

以下では、まずネル・プロイニングの生涯と功績に触れ、次に同研究所の概要を紹介し、最後に彼が生涯を過ごしたザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学の歴史についても少し振り返ってみたい。

Ⅱ. ネル・プロイニングの生涯と功績

1982年当時、筆者がいかに認識不足であったかを思い知らされたのは、ネル・プロイニング教授の百歳の誕生祝いであった。

1990年3月8日、ザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学で開催された百歳記念祝賀会では、ヴァイツゼッカー大統領が祝辞を述べ、ドイツで最も名誉ある大十字勲章をネル・プロイニングに授けている。さらに連邦労働・社会大臣のブリューム、州首相のヴァールマンも駆けつけてお祝いのことばを述べている。イエズス会の神父であり、大学の教授でありながら、第2次大戦後ドイツの経済社会の秩序形成に大きく貢献したことが改めて称賛されているのである。そのような大人物が筆者に会ってくれるというのだから、ゲスト・ハウスの人々が信じ難い思いであったのも無理からぬところであった。

ネル・プロイニング百歳を記念して、Herder 社から『ネル・プロイニング—人間のために屈することのない人』（*Nell-Breuning—Unbeugsam für den Menschen*, hrsg. von H. Klein, Freiburg/Basel/Wien 1989）が、また Bund 社からは『境界領域問題の探求者—ネル・プロイニングの論争的論文集』（*Unbequem Grenzziehung—Streitschriften von Oswald von Nell-Breuning*, hrsg. von I. Brusis/M. Grönefeld, Köln 1990）が出版されている。

前者は、*Frankfurter Allgemeine Zeitung* の主筆クラインの編集になるもので、第1部では、クラインがネル・プロイニングの生涯と功績をおよそ50頁に総括している。第2部では、15人の人々が登場して、彼の功績を称えている。その賛辞の一部を紹介すると以下のようなものである。

「世界の社会的均衡の擁護者」（元ドイツ連邦首相 H. Schmidt）、「社会的国家の共同形成者」（元ドイツ社会民主党副議長 O. Lafontaine）、「社会的平和の促進者」（元キリスト教民主同盟書記長 H. Geißler）、「社会的弱者の代弁者」（元ドイツ労働組合総同盟議長 H.-O. Vetter）、「人間の尊厳の番人」（ミュンスター大学キリスト教社会科学研究所長 F. Fuger）、「倫理的基礎の助言者」（ケルン大学名誉教授 G. Müller）などである。

後者の論文集『境界領域問題の探求者』は Bund 社から出版されているが、Bund 社がドイツ労働組合総同盟（DGB）の出版部であることから、ドイツ労働組合運動に対するネル・プロイニングの功績を称えようとするものであることが容易に推察されよう。おびただしい数の論文の中から17編が抜粋され、「ユートピアと具体的施策」「マルクス主義とカトリック社会論」「労働組合と教会」という三つの表題のもとに分類・配置されている。

追悼文としては、*Gewerkschaftliche Monatshefte* 誌に「統一労働組合の擁護者⁽¹⁾」（F. Hengsbach）,*Sozialer Fortschritt* 誌に「労働者のために働いた聖職者⁽²⁾」（H.-A. Hörsken）, また *Sozialer Sicherheit* 誌には「共同決定と統一労働組合の擁護者⁽³⁾」（F. Troxler）といった記事が寄せられている。

以上のようなことは、ネル・プロイニングの終生の問題意識がどこにあったかをよく示している。とりわけ労働者の人間としての尊厳とその基本的権利がないがしろにされたり侵害されるところでは、断固として闘いを挑む「屈することのない人」であった。そのような問題は人間社会のあらゆるところに起こってくる。キリスト教の信仰と社会観を基礎に形成されたカトリック社会論（*katholische Soziallehre*）を足場にして、政治・経済・社会の広大な問題に取り組んでいく。したがって「境界領域問題の探求者」といわれる。

ネル・プロイニングの社会的活動を見ると、以下のようなものである。

1948年～1965年 連邦経済省および経済行政局の学識経験者諮問委員。

1950年～1959年 連邦都市・住宅建設省の住宅経済問題諮問委員会議長。

1953年～1955年 ドイツ消費組合中央連盟の顧問。

1956年～1960年 労働組合政策・財産形成・企業体制の問題に関する、ドイツ労働組合総同盟の顧問。

1959年～1965年 共同決定財団の顧問。

カトリック教会にとって重要な意味をもつ公的活動としては以下のものがある。

1930年～1931年 ローマ教皇ピオ11世の社会回勅『クワドラジェジモ・アンノ』(1931年)の編纂に参加。

1949年 「カトリック企業者連盟」の創設に協力。

1974年～1975年 ヴェルツブルクにおけるドイツ司教区共同司教会議に顧問として参加し、決議文『教会と労働者』の草案作成に協力。

いろいろな機会に表彰を受けている。主なものは以下である。

1972年 ロマーノ・ゲアルディーニ賞。

1980年 ドイツ労働組合総同盟よりハンス・ベックラー賞。
ドイツ司教会議よりボニファチウス・ゴールドメダル。

1981年 トリア市(彼の出身地)の名誉市民。

1983年 フランクフルト市の名誉市民。

1990年 ドイツの最高栄誉賞、大十字勲章。

ネル・プロイニングのこうした公的な社会活動は大いに称賛されてしかるべきであろうが、彼の最も本来的な活動の場は文筆活動にあったといわなければならない。

1890年3月、トリアに生まれたネル・プロイニングは、1911年、22歳でイエズス会に入会している。早くから司祭の道を歩くことを決意していたのであろう。インスブルック大学で神学を学んだ後、1921年、司祭に叙階されている。1928年、ミュンスター大学で神学博士の学位を取得し、さらに教授資格も認可されている。そして、1928年以来、フランクフルトのザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学の教授として、道徳神学、教会法、社会科学の講義を担当してきたのである。1948年からずっとフランクフルト大学では経済・社会倫理を教えてきた。イエズス会の神父として、また大学教授として、このザンクト・ゲオルゲンを終生の住処とし、そこを拠点に執筆活動が展開されてきたのである。

ネル・プロイニングの執筆活動のスタイルは、一つのテーマについて始めから体系的な大著をまとめるといったものではなく、そのときどきの問題について時宜を

失せぬように次々と論説を発表し、しばらくすると、さまざまな雑誌・新聞等にまさに洪水のように掲載された論説を整理して、ひとつの著作にまとめていくというスタイルであった。

代表的なものが Herder 社から刊行された、全 3 巻から成る『現代の経済と社会』(*Wirtschaft und Gesellschaft heute*) である。

第 1 巻 (1956 年) では、48 編の論説が「原理的問題」(12)、「経済と社会」(4)、「人間と労働」(5)、「職業と社会」(7)、「土地問題」(6)、「住居と家族」(3)、「所有権」(4)、「所得と資本形成」(8) のテーマもとに分類・整理されている。括弧内の数字は論説の数である。

第 2 巻 (1957 年) では、53 編の論説が「労働組合」(10)、「共同決定」(12)、「企業形態」(3)、「利子・貯蓄」(2)、「戦後問題」(6)、「政治生活」(2)、「教会生活」(5)、「教会と国家」(3)、「教会と社会」(9) のテーマに分類・整理されている。

第 3 巻 (1960 年) においては、33 編の論説が「社会」(7)、「社会的市場経済」(2)、「ドイツ統一問題」(2)、「労働組合」(5)、「労働と労働者」(4)、「所有と財産形成」(4)、「社会給付形態」(5)、「その他」(3) に分類・整理されている。

もっとも書き下ろしの形で書かれた単行本もないわけではないが、数の上でもわずかでページ数もあまり多くない。ほとんどは上に示した『現代の経済と社会』と同じスタイルをとっている。

ネル・プロイニングの著作数は、およそ 1600 編ある。大学図書館の図書カードをめくると、著者索引にネル・プロイニングの項目がないので驚いて、参考係に聞くと、図書館に収蔵されているものはすべてウェブサイトにも収録されているので、それを見てくださいという。他方、ネル・プロイニングの全著作目録は、研究所のほうでデータ化し、これもパソコンで探ることができた。1600 という著作数もさることながら、論説のテーマが実に多岐にわたっていることにいまさらながらに驚かされる。

多岐にわたる問題関心の中で、ネル・プロイニングを終生つかんで離さなかった問題領域があったとしたら、それは何であっただろうか。

「労働者のために働いた聖職者」あるいは「社会的弱者の代弁者」として評価されていたように、労働者の問題こそネル・プロイニングの一貫した関心事であったと思われる。彼の論説の多様なテーマの多くは、そこへつながっていく。

筆者なりにネル・プロイニングの功績を総括してみると、以下のようになるのではないと思われる。⁽⁴⁾

- 1) スコラの伝統を継承しつつも、近代社会科学の諸成果を批判的に吸収するこ

とによって、カトリック社会論に新しい地平を開くとともに、現実世界に対する、カトリック社会論の問題探求能力を高めていった。そのことが最も顕著に現われているのが労働者の財産形成問題や労働組合問題、共同決定の問題であった。

- 2) 第2次大戦後、社会経済の秩序形成をめぐる原則的論議において、新自由主義と自由社会主義の狭間にあって、カトリック社会論を基礎とする社会的市場経済論を展開し、キリスト教民主同盟(CDU)や社会民主党(SPD)の政策原理に大きな影響を及ぼした。
- 3) とりわけ土地・住宅問題、労働者の財産形成問題、労働者の共同決定問題について原則論的な論議を展開するとともに、学識経験者として政府の政策決定過程に参加し、積極的に政策を提言した。
- 4) 20世紀初頭から1910年代にかけて、ドイツ・カトリシズム内に生起した労働組合をめぐる論争(「労働組合紛争」)において、近代的労働組合運動に否定的立場をとる「統合主義」に対して、労働組合を原則的に肯定する立場を表明するとともに、政党政治的中立性と世界観的寛容性を指導原理とする「統一労働組合原理」を主張した。このような労働組合思想が第2次大戦後形成された統一労働組合(ドイツ労働組合総同盟)によって高く評価されるに至った。
- 5) 世界観においてはマルクス主義と対決しつつも、その近代資本主義批判を正當に評価し、カトリック社会論の資本主義批判の糧としていった。マルクス主義をキリスト教の不倶戴天の敵とはせず、両者間に対話の道を開いていった。

筆者は、労働組合の問題、所有参加と財産形成の問題、共同決定の問題、企業体制(コーポレート・ガバナンス)の問題、労使関係の問題、パートナーシップ経営の問題、カトリック社会論・社会的カトリシズムの問題等について、これまでネル・ブロイニングの著作から多くを学んできた。その過程でたえず痛切に実感してきたことは以下のことであった。すなわち、労働者の人間としての尊厳とその基本的権利が尊重されるような経済社会を築くことは、社会的正義の要求であり、キリスト教的愛の要請であるという深い確信が、ネル・ブロイニングをして「屈することのない人」「境界領域問題の探求者」となさしめてきたということ、これである。

Ⅲ. ネル・ブロイニング経済・社会倫理研究所

ザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学は、フランクフルト中央駅の南東およそ10キロ、オッフェンバッハー・ランド通りにある。駅前から16番の市電で25分ほどの

ところで、周辺は住宅地で北側には農地が広がっている。昔はおそらく一帯は静かな田園地帯であったと思われる。

訪ねて行ってみると、思いのほか小さな研究所であった。所長のヘングスバッハ教授の研究室、その隣に研究所員（Mitarbeiter）や研究助手の部屋が三つ続き、それに事務室が一つ、計5部屋から成る研究所であった。とくに資料室というものはなかった。外にはすぐ大学図書館があるので、必要な資料はそこに整備されているという。ミュンスター大学のキリスト教社会科学研究所のように、独立した建物の中に研究室や演習室とともにかなり広い図書資料センターを整備している研究所を想像してきたので、やや氣勢をそがれた感があったが、資料の探索は、言われた通り大学図書館で十分に用が足りた。所長のヘングスバッハ教授はずっと出張中で、研究所員が手助けしてくれるでしょう、というお手紙をいただいたままで、残念ながらお目にかかることができなかった。

1. 研究所の概要

研究所の目的は、「キリスト教的経済・社会倫理の領域でネル・プロイニングが果たしてきた科学的・政策的活動を継続していくこと」に置かれている。この場合、現代の科学的・政治的条件のもとにあって、以下のような目標を目指そうとしている。

- 1) 学際的な研究活動を通して、キリスト教的経済・社会倫理の可能性を高めていく。
- 2) キリスト教的経済・社会倫理の基礎に検討を加え、現代の多元的社会にそれを適応させる。
- 3) キリスト教的経済・社会倫理は、政治的に参加する男女キリスト者の実践反省として営まれる。
- 4) キリスト教的経済・社会倫理は、社会的改革政策の新しい役割と目標および形態を目指そうとする。

2. 研究所の構成

所長はヘングスバッハ教授（Friedhelm Hengsbach）である。イエズス会の神父である。1982年、ネル・プロイニング教授に「あなたの後継者はだれですか」と質問すると、すぐにヘングスバッハの名をあげてくれた。ここザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学で「キリスト教社会倫理」講座を主管している。経済倫理・労働倫理に関する著作が多いが、労働組合問題についても、ドイツ労働組合総同盟の

『労働組合月刊雑誌』(*Gewerkschaftliche Monatshefte*) などによく書いている。現在の研究テーマとして、「民主的市場経済の理論」「労働の未来と社会保障制度」があげられている。

研究所員として、ヤコビ (Tobias Jacobi) 氏とボーメイヤー (Axel Bohmeyer) 氏がいる。研究助手としてハーン (Judith Hahn) 氏が働いている。それぞれ研究テーマをもって活動を行っている。

3. 研究プロジェクト

同研究所の研究活動は、一定の研究プロジェクトのもとに展開されている。現在、二つのプロジェクトが進行中であった。

1) 教会立病院の変革：ドイツでは、公的な医療機関の中で教会（修道院）立の病院が大きな地位を占めているが、病院制度の経済的合理化が大きな課題となっている。この課題は、病院における労使関係の形成と共同決定（従業員代表制）の問題を改めてクローズアップさせるとともに、教会（修道院）立の病院がもっている固有のプロフィールをどう新たに形成していくかという問題を提起してくる。この問題を実証的に研究しようとする。プロジェクトの責任者は研究所員のヤコビ氏である。

2) “ニューエコノミー” の論証的に現実的な輝き：現代の時代診断において“ニューエコノミー” という鍵概念がよく使われている。しかし、この概念にはさまざまな社会現象が重層的に詰まっており、その内的な中核ははなはだ漠然としている。“ニューエコノミー” とは何であるかについて、社会的事実として、また論証的な現象として、改めて検討を加える必要がある。このプロジェクトは、ドイツ労働組合総同盟 (DGB) のハンス・ベックラー財団より研究助成を受けており、プロジェクト責任者は研究所員のボーメイヤー氏である。

4. 研究叢書の刊行

1992年以来、同研究所では、「フランクフルト社会科学・社会倫理研究叢書 (Frankfurter Arbeitspapiere zur sozialwissenschaftlichen und gesellschaftlichen Forschung)」を刊行している。現在までのところ39編の叢書が刊行されている。

叢書の研究テーマは、原則的にはキリスト教的経済・社会倫理に関わるものとなっているが、それが研究プロジェクトと結びついているかぎりでは、現代史や社会・経済科学のテーマや方法に関するものも見られる。

執筆者は、同研究所のプロジェクトやディスカッションに参加している人々を中心としているが、そのテーマが研究所の目的から見て適当と思われるときは、外部者にも叢書執筆の機会が与えられているようである。

最近の叢書からそのテーマだけをいくつか見てみよう。その多くがグローバル化時代における経済・社会倫理の問題を扱っていることがわかる。

『国際金融市場における南北関係の正しいあり方』（第39冊）、『国際金融市場の政治的規制—経済倫理的反省』（第37冊）、『国際通貨基金—開発援助か抹消誘導か』（第36冊）、『分配の正義—社会的分配、とりわけ社会国家的再配分の規範概念の社会的分析』（第32冊）、『グローバル化時代における社会政策の未来』（第32冊）、『ヨーロッパ社会政策理論の展開』（第29冊）、『グローバル化圧力下にある社会政策理論—国家・国際社会政策理論におけるグローバル化パラダイムの受容』（第28冊）、『労働は生活の一部—労働世界と生活世界の関係』（第27冊）、『国際金融市場への発展途上国の統合—キリスト教経済倫理の観点から』（第26冊）

IV. ザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学と「文化闘争」

1911年、イエズス会に入会したネル・プロイニングは、オランダのヴァルケンブルクにあったイエズス会哲学・神学院で哲学の勉強を始めている。なぜオランダなのか。ドイツにはイエズス会の哲学・神学院はなかったのか。フランクフルトにザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学が設立されるのは、1926年のことである。このときになってようやくイエズス会は、ドイツに哲学・神学教育の拠点をもつことができたのである。⁽⁵⁾

1872年、宰相ビスマルクによって制定された「イエズス会法」によって、ドイツのイエズス会はすべて国外に追放され、ドイツ国内でのあらゆる公的活動が禁止された。1917年になってようやく「イエズス会法」は廃止される。この間およそ50年間、ドイツのイエズス会は、外国暮らしを余儀なくされてきたわけである。

ドイツ人イエズス会神学生の哲学・神学教育は、イギリスのリバプールで行われたこともあったが、1894年以降は、オランダのヴァルケンブルクにイエズス会ドイツ管区の本部が置かれ、そこで哲学・神学教育が行われてきた。

こうしたザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学の前史を紐解いていくと、プロイセンによるドイツ帝国統一過程で起こったカトリック弾圧の歴史を想起せずにはおられない。19世紀初頭からいろいろな形でカトリック弾圧が始まっていたが、ビスマルクの登場によって、それは最高潮に達した。1871年に始まって1887年に終結す

る「文化闘争」(Kulturkampf)がそれであった。

ローマのヴァチカンを宗主とするカトリック教会と、教会を国家の監督下に置こうとするプロイセンの国教会主義が正面からぶつかったのである。しかもプロイセンは、プロテスタント(新教)が支配する北ドイツをその領土としていたために、「文化闘争」は、新旧両派の宗教的対立を再燃させる形となった。

とりわけ北ドイツではカトリックの司祭が追放され、司祭不在の小教区が続出した。しかも公立学校における修道院やカトリック教会の教育権を国家が収奪したので、数千にのぼるカトリック教育者がその職を失ってしまった。さらに外国籍の修道者が追放されるとともに、レデンプトール会、ラザロ会、聖霊会など、イエズス会以外の修道会も国外追放処分に見舞われた。

カトリック教徒の政治的・社会的復権をめざして、1870年、「カトリック中央党」が結成された。また、1875年には「社会主義労働者党」(ドイツ社会民主党の前身)が結成され、次第にビスマルクに対する抵抗勢力が強まり、1890年ついにビスマルクは失脚する。

1887年をもって一応「文化闘争」は終結したとはいえ、それは表向きのことで、なお水面下では「文化闘争」は続行していた。「イエズス会法」が1917年まで効力をもっていたというのがその最大の証左であるが、1926年、ザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学が開学を迎えたときもなおその余韻は強く残っていたようである。

1926年10月25日、同大学が開学の祝典を迎えたとき、キリアン司教は、その祝典を目立たないようにするよう警告を与えていたといわれる。キリアン司教自身は、ベルリンのプロイセン文化省の次官から、新教連盟の側から教会政策的抵抗が起こるかもしれないから、このイエズス会の哲学・神学大学の開学をあまり広く吹聴しないようにと、忠告を受けていたという。

こうしたエピソードは、ドイツ帝国統一過程におけるカトリック弾圧がいかに過激なものであったかということと、宗教改革以来の新旧両派の対立が「文化闘争」によって再燃し、その余燼がワイマール期にはいってもなお燻っていたということを教えてくれる。

ヒトラー政権下では、ここザンクト・ゲオルゲンもヒトラー・ユーゲントに襲われ、その敷地と建物を収用されるところであったが、国防軍がすでに一部を軍用病院として利用していたことを口実に、あやうく収用を免れることができたという。

同大学の設置に当たっては、インスブルック大学の神学部のように、フランクフルト大学の中に、イエズス会が主管する神学部を創設するというプランもあったが、フランクフルト市とフランクフルト大学があまりにも自由主義的で、神学生の養成

の場にはふさわしくないというので、現在の地に独立した一つの大学として生誕を見たわけである。

もともとの哲学・神学大学は、イエズス会と司教区の神学生（聖職者志願者）の養成を目的として創設されたものであったが、現在では、一般信徒の学生、しかも女子学生も増えてきているようである。いわゆる神学生とその他の学生の比率は、後者のほうが次第に大きくなりつつあるという。

ザンクト・ゲオルゲンのように独立した哲学・神学大学は、ドイツにはわずかしかない。ほとんどは既存の大学に哲学・神学部が置かれ、そこで神学生の養成も行われている。歴史の古い大学を訪れると、大学の中に新教とカトリックの聖堂があり、そこにそれぞれの哲学・神学部が隣接されている。いまなおこうした神学部が連綿として存在しているのは、ドイツが伝統的にキリスト教的社会であり、教会の聖職者を育成するという課題が大学に課せられてきたということもあるが、他方、義務教育課程では宗教教育が義務化されているため、宗教教育の教師を育成するという課題もあるからであろう。

V. む す び

ネル・プロイニング研究所のロゴマークは、ローマ字の小文字 i を図案化したものである。その由来は、百歳記念のお祝いで、何か若い世代に助言を与えてくれるようにと頼まれたときに、ネル・プロイニングが語った以下のことばから来ている。

「たとえ敵対者であれ、その主張の中に少しでも真実が含まれておれば、それを厳格に (aufs Letzte), i の字の点をゆるがせにせずに (auf das Tüpfelchen auf dem i) (つまり一点一画をゆるがせにせず), そのすべてを承認することがその方法である。私にとって、これは何よりも知的誠実さの要求であり、しかもそれ以上に、これは方法的にも最も適切で成果を約束してくれる方法である」と。

これはまさに対話による真理の発見である。自分にも相手にも完全な真理はないという、謙虚な姿勢が根底にある。そして、人間は、独りでは真理に到達することはできないのである。他者の助けがあってはじめて真理に近づくことができる。筆者もそれに同意するものである。そこにネル・プロイニングの深い信仰を感じる。

最後に、ネル・プロイニングの同僚ケルバーのことばを紹介して、この一文を閉じることにしよう。

「ネル・プロイニングがその生涯とその研究を通してはっきりとわからせてくれたことは、この世界においては、政治的な権力装置がなくとも、ことばと専門知識、

そして人格的模範という静かな説得力によって、ものごとをよりよき方向へ改革していくことができるということである。」⁽⁶⁾

追 記

今夏、ネル・プロイニング経済・社会研究所における文献探索と文献収集については、同研究所の所長ヘングスバッハ（Fiedhelm Hengsbach）教授、とりわけ同研究所員のヤコビ（Tobias Jacobi）氏には一方ならぬお世話になった。また、ザンクト・ゲオルゲン哲学・神学大学図書館の館長マークス（Stark Marcus）氏からは、閲覧についてさまざまな便宜を図っていただいた。誌上を借りて、ここに深い謝意を表するものである。

註

- (1) Hengsbach, Friedhelm: Ein Verfechter der Einheit. Oswald von Nell-Breuning SJ (8. März 1890–21. August 1991), in; *Gewerschaftliche Monatshefte*, 9/1991, S. 604.
- (2) Hörsten, Hein-Adolf: Ein Gottesmann für die Arbeiterschaft. Zum Tode von Oswald von Nell-Breuning, in; *Sozialer Fortschritt*, 40. Jg., H. 9, 1991, S. 211.
- (3) Troxler, Ferdinand: Oswald von Nell-Breuning gestorben. Verfechter der Mitbestimmung und Einheitsgewerkschaft, in; *Sozialer Sicherheit*, 40. Jg., H. 10, 1991, S. 298.
- (4) ネル・プロイニングを表題とする、筆者の論稿には以下のようなものがある。
 増田正勝「ネル・プロイニングの経営思想—共同決定思考の展開」『山口経済学雑誌』第24巻第4・5号、1975年5月、466–487頁。
 増田正勝「ネル・プロイニングの経営思想—社会的パートナーシップ思考の展開」『山口経済学雑誌』第26巻3・4号、1976年11月、43–79頁。
 増田正勝「ネル・プロイニングの所有政策思想—労働者の財産形成と投資賃金（上）」『山口経済学雑誌』第36巻第5・6号、1987年5月、17–36頁。
 増田正勝「ネル・プロイニングの所有政策思想—労働者の財産形成と投資賃金（下）」『山口経済学雑誌』第37巻第1・2号、1987年9月、89–112頁。
 増田正勝「ネル・プロイニングの労働組合思想」『南山経済研究』第9巻第3号、1995年2月、199–224頁。
- (5) Schatz, Klaus: 75 Jahre Sankt Georgen. Vortrag aus Anlaß der Jubiläumsfeierlichkeiten in Jahre 2001.
- (6) Kerber, Walter: Oswald von Nell-Breuning. Seit sechs Jahrzehnten soziales Gewissen der Kirche, in; *Stimmen der Zeit*, 208. Bd., 115. Jg., H. 3, 1990. S. 207.